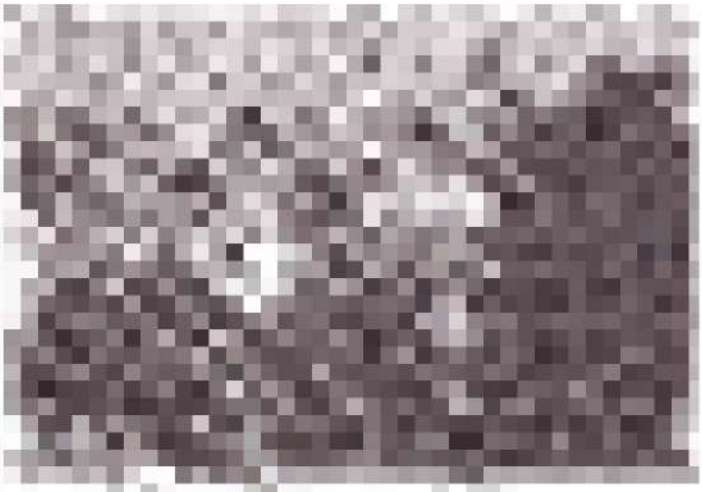

オペラ・サンモリッツのロッシーニ《オテロ》

今年9回目を迎えるオペラ・サンモリッツは、高級避暑地の夏の華である。ロッシーニの《オテロ》は今回がスイス初演になる。「テノールが6人も登場し、技を競い合うオペラは他に類を見ないということで、その争いを剣道に例えた」と演出家のラトゥケは満足げだった。『ムーア人のオテロがヴェネツィアで孤立』ではなく、『私達と同類のオテロが、剣道の惑星のような異国に紛れ込む』という設定だったので、その異質さを伝える役割は果たしていたが、道着風の衣装で、ただでさえテノールが多いキャストがより見分けにくく、動作も表現も制限されてしまった。

音楽的には、「子供の頃からロッシーニの《オテロ》が振りたかった」と珍しく興奮気味に話すオランダ出身のシュルツに率いられたブダペスト交響楽団が、とてもロッシーニらしい音楽を奏でた。題名役のトゥラッラはオテロらしい貫禄を出していたが、鼻にかけ過ぎる発声が気になり、また、アジリタの最高音で声がひっくり返るハプニングもあった。デズデモナのラドミルスカは艶のあるメゾソプラノで、ドラマティック・ソプラノのパートを好演し、ヤーゴのシニョレッロは卑劣な性格描写と、スピントのきく声で際立っていた。ロドリーゴのイヴィーリアは、高音は問題なく、音楽性もあるが、声の支えが弱いのと、興奮気味なのが気になった。エミーリアのシュナイダーは上から下まで柔かなアルトで、歌いにくい音響の中、多少怒鳴り気味の歌手陣の中で、無理がなかった。来年は10周年を記念し、改築後のマロイヤ邸で《セビリアの理髪師》が上演される。　（中 東生）

※P164に続く